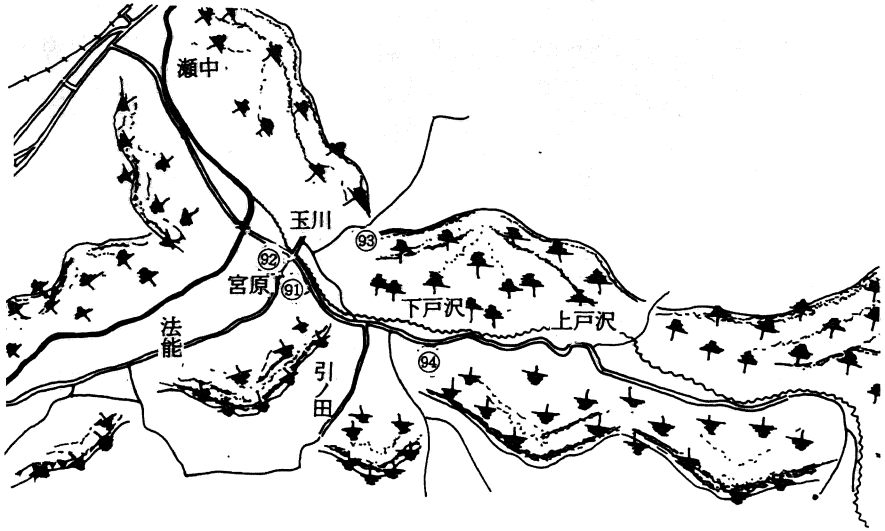
三吉地区

91. 生出神社
92. 専徳寺
93. 阿夫利神社の彼岸桜
94. 正蓮寺



91. 生出神社（宮原）

宮原の生出神社は、四日市場、井倉の生出神社と共に、生出三社の一つである。

宝暦一一年（一七六一）谷村代官江川太郎左衛門英征が社殿を造営した。

祭神は建御名方命・八坂刀売命で、祭礼は九月一〇日に行なわれている。

生出神社社殿

92. 専徳寺

浄土真宗宝泉山専徳寺は法能の宮原に所在し、本尊は阿弥陀如来で、貞観二年（八六〇）祭空律師の開山と伝えられている。

弘安年間まで、天台、真言、浄土宗と改宗し、弘安三年（一二八〇）祐専上人の時、蓮如上人に従い浄土真宗となった。

本堂向拝の竜の彫刻は、一木の透彫りでみごとなものである。

また、向拝左右一対の賓頭盧尊者は、虹梁にかかる重量を肩で支えている。力持ちを象徴し、神通力にすぐれた十六羅漢中第一の尊者といわれ、彫刻は天保年間（一八三〇～四三）のものと推定されている。

専徳寺賓頭盧尊者

93. 阿夫利神社の彼岸桜

玉川から与縄へ越す天神峠の麓に、阿夫利神社がある。

祭神は大山祇命で、祭礼は玉川の氏子により九月七日に行なわれている。

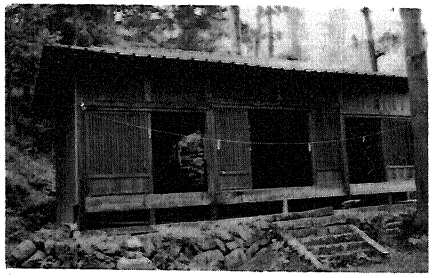
神社の鳥居のそばに彼岸桜の大木がある。昭和一一年樹幹が西側に倒れたため、幹の一部から芽を出して成長しているもので、植物学上興味深いものである

倒れた幹は根元から三・三メートル、西側の樹皮はげ口の周囲五・三メートル、西側の樹皮は根元からはげて、木部をあらわしている。

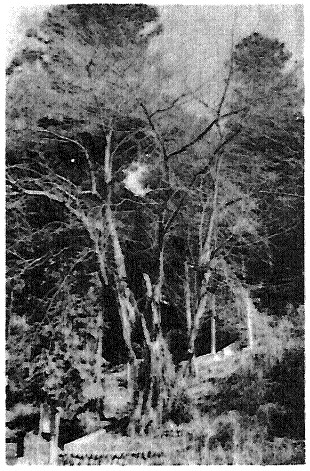
幹の切り口に近い所から上に出た枝が残っており、枝は南西の方向に向い、長さ四メートル、枝の分れまでの太さ一・二メートルで、この枝は毎年花をつけている。

樹高八メートル、枝張り南北一二メートル、東西九メートル、花期は四月一〇日頃で、花色は淡紅色、花径は三センチメートルである。

昭和四九年四月一一日、市の天然記念物に指定された。



阿夫利神社社殿



彼岸桜

94. 正蓮寺

浄土真宗宝池山正蓮寺は下戸沢に所在し、本尊は阿弥陀如来で、以前は田光山円融と称した。

天長の初め、甲斐源氏の新羅三郎義光の子孫曽根禅師房厳尊の二男が僧となり、円融寺に来て旭羅と称した。天台宗の本山に願い出て、寺号を円融寺、また伝説にちなんで山号を田光山と名付けた。その後、寛喜二年（一二三〇）にいたり、唯善法師により浄土真宗となり、寺号を宝池山正蓮寺と改め、現在に至っている。

本堂は、茅葺き屋根であったが、昭和五三年に開山以来の大改修が行なわれた。梵鐘は、明和九年（一七七二）壇徒により寄進されたものである。

天和三年（一六八三）谷村に流寓した芭蕉が正蓮寺に遊び「名月の夜やさぞかしの宝池山」と詠んだと伝えられている。

正蓮寺の伝説

天長年間（八二四～三三）戸沢に三町余の池があって、底が見える程、水が澄んでいた。池の周囲は樹木が繁り、春は花を眺め、夏は暑さをさけ、秋は紅葉を眺め、冬は雪景色をたずね、四季の景色が美しかったので、近村の人々の憩いの場所であった。この池のほとりに、白兎の形をした鹿のような動物がいて、いつも樹々の間をとび廻っていた。別に害をおよぼすことがなかったので、人々はこの辺の主として放しておいた。

しかし、この池に近村の老人達が話し合って、一〇反余りの水田を作ってしまった。その後、いつもこの池のほとりに来て、四季の景色を眺めては楽しんでいた老人がたずねて来て、「夢の中で、ここの主である奇獣が天に昇ってしまった」と言って去って行った。不思議にもその後、奇獣の姿は池のまわりから消えてしまった。奇獣がいつも休んでいた田の西北の高台に、不思議に光るものがあった。人々がおそるおそるそばに行ってみると、今まで無かった石が二つならんでいた。

人々は、これは奇獣の霊だと信じ、その霊石のあったところに一堂を建てて祀り、「池の堂」と名付けたという。

今でも池のあった所は「田元」という地名が残されている。